

黒本尊と祐天上人

大正大学教授 玉山成元

『徳川実紀』によると、慶長十九年（一六一四）十一月十五日、徳川家康は、大坂城を攻めるため、京都二条城を出て奈良に向った。このとき木津から二十町ばかりのところを通ると、左右の藪陰から一発の銃声が聞こえた。と同時に伏兵が現われた。そして通行をさえぎろうとして関の声を上げた。家康につきそっていた軍隊は驚いたが、そのとき中坊某というものが敵の近くに馬を乗り出し、われわれは大坂への加勢として籠城するため、急に急ぐところだといった。すると伏兵の中から一人が進み出て、家康が木津に着いたことを聞いた。そして今夜中に奈良にゆくからここで待伏せるよう真田幸正より命じられている。大坂方に味方するのなら、大將が前に来て名のれという。そこで安藤直次は馬を乗り出し、自分は木村重成の親縁のもので、一族を引き連れてこれから応援にゆくところだといったところ、伏兵の大將だと思われる人が何人かと相談し、道を開くことになった。このすきに家康は共にまじって通過した

が、伏兵はまた追いかけてきた。そこで安藤直次はいたしかたなく、轡を返し、大勢の中に打って入った。敵は大勢、御方は三分の一の少数ではあるが、いずれも元気のいいつわものばかり、必死になって血戦を展開した。そのとき後よりお供の軍隊が多数かけつけてきたので、敵は敗走し、家康は無事奈良につくことができた。この軍中に増上寺存応上人の弟子廊山上人と了的上人という両僧がいて黒本尊という仏像をもっていった。この仏像の化身が黒装束の法師武者となつて、御方を助けて敵を追い散らした。その夜、仏龕を開いてみたところ、その像には銃丸のあとが三つあった。そして足には泥がついていたという。

この話は事実ではないが、黒本尊は徳川家康の念持仏で、今でも増上寺の安国殿本尊として安置されている。恵心僧都の作といわれる二尺六寸（約八〇センチ）の阿弥陀仏立像で、もとは三河国桑子明眼寺（岡崎市）の靈仏であった。永禄七年（一五六四）徳川家康が無理にたのん

で譲りうけ岡崎城に移した。その後家康の念持仏として帰化された。二代將軍秀忠も、ご利益のある仏様として尊敬され、江戸城内に安置し、天徳寺・誓願寺・大養寺・本誓寺の四か寺に命じて供養させた。三代將軍家光のとき阿弥陀堂を建立して安置したが、のち増上寺に奉納された。寄木造りの阿弥陀立像に金箔をおしたものであるが、長い間香煙に薫じつれて黒色に変化したため、黒本尊と呼ばれたものであろう。開運の秘仏として庶民にも親しまれた。

黒本尊にまつわる話が多いが、六代將軍徳川家宣も篤く帰依した一人である。家宣は元和二年（一六一六）になくなつた先祖家康の恩にむくいるため、百回忌の法要を盛大に行おうと計画していた。しかし、病のため実行できないまま、正徳二年（一七一二）十月十四日この世を去つた。家宣は四歳になる愛児の家継に、自分に代つて法要を行うよう頼み、秀忠や家光の法要もこれに準じて行うよう命じ、自分が死んだら増上寺に埋葬してく

黒本尊と祐天上人

大正大学教授 玉山成元

れるよう頼んでいる。さらにまたあまりにも幼い家継の将来について心配し、大老井伊直諲をはじめ、側用人間部詮房に頼んでいる。それは異常なほどであった。綱吉の後をついだ家宣は、生類憐れみも令を廃止し、柳沢吉保を退けて新井白石を用い、政治の刷新を計ったが、途中でなくなった。周囲の人々は、何としても家宣の長命を願い、とくに御台所天英院は前日から鶴岡八幡宮をはじめ、伊豆・箱根権現・三島・香取・鹿島の大明神などに祈祷をさせた。このとき増上寺の祐天上人は、家康の念持仏であった黒本尊を江戸城に安置して無事を祈った。家宣にすれば、百回忌の法要ができなかったことをこの黒本尊とおしてわびるとともに、開運のご利益によって自分も生きようとがんばったに相違ない。天英院もそれを期待したに相違ない。しかし奇跡はおこらなかつた。家宣は祐天上人から授かったお名号と数珠をもって黒本尊を拝み、お十念を授かって五十一歳の生涯をとじた。もともと信頼しきつた祐天上

人にみとられて極楽に旅立った家宣はしあわせだったに相違ない。しかし幼児家継への心配は残ったろう。

翌年十月二十日、祐天上人は再度黒本尊を護持して大奥に参上した。御台所天英院のたつての願いによるものであった。このとき上人は幼い家継に十念とお守りの名号を授けるとともに、天英院や側室の法心院・蓮淨院にも数珠や血脈を授けている。このときちやうど家宣の一周忌に当たっている。とすればなき家宣の菩提を弔って追善を行ったものであり、天英院はじめ側室たちも、自分の気持ちを整理するためのものだったに相違ない。さらに家宣が最後まで心残りであった幼君家継に運が開けるよう家康の力をもかりて願ったものであろう。しかもその重要な役目を果たしたのが、生き仏として尊敬された祐天上人であったところに意義がある。こうして黒本尊は、ますます有名になっていった。